

## 5. 蛮女の情歌

日本の新村出の著『南蛮更紗』の中の第七篇「南蛮に関する俚謡その他」の項に次のような一節がある。

“筑前<sup>からとまり</sup>韓泊の水主で孫太郎といふ若者が、明和（1764～71）の初年にボルネオに漂流して帰つて来て南国の奇聞を語り、それを録して考証を加へた『南海紀聞』といふのがある。藩の儒者青木定遠の著述である。孫太郎は島の南の港町バンジャルマツシンで聞いた黒坊の俗謡をおぼえて来て、その三首が巻末に書きとめられた。馬來系のボルネオ語の原歌は、ここには引かぬが、編者定遠は、その一首を漢訳して、

‘白鳥飛未過、  
少年白晳且帰支那。’

〔白鳥飛びて未だ過ぎず、少年白晳にして且さに支那に帰らんとす。〕

として、その義を釈して、‘崑崙奴之女、悦支那年少顔色白晳、惜其帰也’と云つた。単純なもので歌として取り立てるほどのものではないし、又実際やかましい銅鑼太鼓ではやし立てられながら蛮声で謡はれたら堪へられたものではあるまいが、『紀聞』うちに、

“‘鸚哥’ 種類甚だ多し、紅白緑或は五色を備へしあり、孫太郎薪樵<sup>まきこり</sup>に行きしとき、山野にて毎々見たり、三々五々聯翩として花樹の間に飛集す、奇観云ばかりなし。バンジャルマツシンにも籠鳥にして愛玩す、甘蔗砂糖水にて飼ふとぞ。”

“‘孔雀’ バンジャルマツシンにて各家これを蓄ふ。早天より飛去り、日中は虚空に翱翔す、仰いで是を望むに燕の大きさにも見ゆ、薄暮には家々のねぐらに帰り宿すとなん、云々。”

“とあるくんだりなどをを連想しつゝ、あんな歌でも之を誦んでみると、黒女の恋も恰好な題材であることとおもへる。まして徳川時代の気分で味へば、別趣の感が湧き出でる。あの港町は、明朝のころより支那との貿易地で海商の去来もあつた処で、『東西洋考』などにも文郎馬神の文字をあててある。従つて、この「白鳥飛未過」の小歌も、例の『松の葉』の中の「長崎の鶏は」の一節を想起さしめるのである。”

『松の葉』は元禄十六年（1703）編集刊行の俗歌集で、巻一に一首初の歌がある。

長崎の鶏は時知らぬ鳥で、  
真夜中にうたふてうたふて、君を戻す。

唐の張文成の著『遊仙窟』に、“憎む可し病鶻、夜半人を驚かし、薄媚の狂鶏、三更に暁を唱す”という句があるが、常に日本の俗歌に注する者の引くところで、大意は同じである。

※初出：1925年7月20日『語絲』第36期